

# 探求心教師も取り戻そう

新しい年度が始まりました。高校の入学式で、校長が面白い話をしていました。米国の研究で、2011年に小学生になった子どもの65%が、大学を卒業した後に「今存在していない職業」に就くだろう、というのです。私たちは、それほど社会や経済が急速に変化する時代に生きています。

学校の教育内容や方法も変化を迫られています。大学センター入試が大きく転換し、今年度中学校に入学した新1年生が大学に行く場合、新しい入試を経ることになります。大ざっぱに言えば、暗記に偏る問題から思考力や表現力を重視した問題に重心を移す、ということなのです。

21世紀の社会をつくっていくためには従来型の学力では対応できないと考えられています。最近の学生には主体的に問

## はぐくむ 21世紀型の学力へ

題を発見して解決していく姿勢が欠落している、と指摘されています。

かつて、国際的な学習到達度調査で日本の順位が低下したところなどから、子どもの学力が大きな問題となりました。得た知識を活用して主体的に考え、発信できるための教育へと脱皮するはずでしたが、学力低下への危機感がゆとり教育批判につながり、詰め込み教育をより助長するというゆがみを生んだと思います。学校側が落ち着いて授業改革に取り組む間もなく、転換が図られたのです。

21世紀型学力の方向へかじを切ることや知識の暗記・再生に偏る大学入試の改革は必要だと思います。

昨今、アクティブラーニングという言葉がよく聞かれます。受け身ではない能動的な学習ス

タイルを指します。かつて総合学習が導入されたのも同じ目的でした。学力低下問題でやり玉に上げられた総合学習に再び光が当たり始めているのです。日本の教育界は振り子のように動いているように感じます。

決められたカリキュラムを教える授業に比べて、主体的で能動的な学習を構築するには、教師の創造力が問われます。それを培うためには、多忙化の問題を乗り越え、教師自身が自らの知的な関心に沿ってものごとを探究する営みを取り戻すことが大事ではないかと思えます。

基礎的な知識の伝達は大切です。しかし、教科書をかみ砕いて教えるだけでは本当の学ぶ喜びを伝えきれないように思うのです。入試制度の変更は、授業のあり方を根っこから変える可能性を秘めているよう感じます。

（自由の森学園理事長

鬼沢真之）